

# ニュースレター 事業短信

from AIKOH

2016(平成28)年9月16日(金) **No.129**

<発信者> 社会福祉法人愛光理事長・法澤奉典  
043・484・6391(本部) / 043・484・6571(理事長室直通)  
(URL) <http://www.rc-aikoh.or.jp/>  
(Eメール) [mail@rc-aikoh.or.jp](mailto:mail@rc-aikoh.or.jp)

## CONTENTS (今月号の内容)

- \* 日誌抄録(1頁) : (2016年8月1日～)
- \* おもな動き(2頁) :
  - ・愛光秋まつり・今年は「韓国フェア」
  - ・佐倉市長が市内の施設長と懇談
  - ・設備更新工事に着手へ  
(職員状況:2016年8月中)
- \* 現場の内外で(3頁) :
  - ・非常時対応の判断ミス
  - ・ちょっとお隣まで!
  - ・「山の日」のメニューは…
- \* 情報&ニュース(4頁) :
  - ・事件から1か月…
- \* マイタウン(5頁) :
  - ・新たな地域貢献活動実施へ
  - ・異常気象?浸水騒動
- \* 三代目燈台守(6頁) :
  - あの感動ドラマの裏側で

## ▽日誌抄録(2016.8.1～)

月/日(曜)	記事
8/5(金)	後援会・愛の灯台基金役員会(本部第1会議室)
6(土)	広島原爆忌/リオデジャネイロ・オリンピック開幕(現地5日)
7(日)	立秋/イチロー、米大リーグで3000本安打達成
8(月)	運営会議(月次報告:視障センター)
9(火)	長崎原爆忌
10(水)	来春採用職員選考(第2回)
11(木)	山の日
15(月)	終戦記念日
16(火)	佐倉市長と市内施設長との懇談会
22(月)	運営会議(本部第1会議室)
27(土)	根郷福祉祭り(南部地域福祉センター)
31(水)	めいわ利用者韓国旅行へ(～9/2)
9/1(木)	防災の日
2(金)	総合防災訓練(本部・障害者支援施設)
8(木)	リオデジャネイロ・パラリンピック開幕
13(月)	運営会議(月次報告:視障センター研修室)

今年の8月は“連日猛暑”という現象はありませんでしたね。どちらかと言えば、天候不順気味で、あちこちで豪雨の被害が出て、岩手県ではグループホームが浸水し、入居者9人が亡くなりました。また台風被害にはあまり縁のなかった北海道に上陸、ジャガイモやタマネギの収穫時期と重なり、その影響は店頭の価格にも出てきているとか。水不足は解消してホッとしている人もあれば、思わぬ天災に頭を抱える農家ありと、やはり自然災害と隣り合わせにある日本列島だなど、つくづく思い知らされます。

季節は確実に夏から秋へと向かっています。平穏に爽やかな気候の中で、味覚の秋を楽しめたらいいなと願っています。

## ▽おもな動き

### 愛光秋まつり 今年「韓国フェア」

第22回・愛光秋まつりは、きたる10月8日（土曜日）の開催予定です。

今年の注目は「韓国フェア」。開催日に合わせて姉妹施設・ラファエルの家（韓国ヨジュ市）から院長以下10名が来日。入所者の作品や施設のようすを紹介するパネルを持参して、佐倉の皆様にご覧いただくことになっています。

そのほか、例年に増して楽しい企画を予定しています。ぜひお立ち寄りください。

### 佐倉市長が市内の施設長と懇談

佐倉市内の高齢者と障害者の関係施設で組織する佐倉市社会福祉施設協議会（佐倉施設協）の例会が8月16日に開かれ、藤和雄・佐倉市長が出席されました。高齢者や障害をもつ人の福祉は、いまやもっとも身近な行政（市町村）の姿勢次第です。現場のナマの声にトップが耳を傾け、それが施策に反映されることが期待されます。

当日施設協が提出した障害施設関係での要望事項は、①地域生活支援拠点の整備促進（グループホーム、重度障害者の日中活動）、②重度障害者の入浴支援を地域生活支援事業に、③災害発生時の対応、④障害者理解を促進するための福祉学習の実施、など。高齢施設関係では、①介護現場への外国人雇用の促進・短時間労働の障害者雇用支援、②病院・福祉施設労働者等のために保育園の「日曜日営業」、③機能回復改善に伴う介護度変化への助成、などです。

### 設備更新工事に着手へ

築22年の本部事業所は大規模修繕や空調・給湯設備の経年劣化に対応してきているところです。これらに続いて、他の設備機器類の更新時期が迫っているとの予測から予算措置を講じて、日常のサービス提供に支障のないように取り計らってきたところです。年次計画で対応する予定の防災設備（非常通報）の一部（全館放送）の不調、また電話回線の内線通話にも不具合があり、これらを前倒して機器更新工事を行うことといたしました。9月17日の理事会、評議員会での承認が得られ次第、年内にも改良工事に着手する予定です。

■職員状況 (2016年8月中)	*採用：10（サポート1・パート・アルバイト9） *退職：13（パート・アルバイト13） *休職：1（正職1） *2016年8月31日現在：職員現員392人 （正職162／サポート又は常勤嘱託44／パート又は非常勤嘱託186）
---------------------	--

## ▽現場の内外で

### 非常時対応の判断ミス

今夏、台風や豪雨が関東地方でも大きな影響を与えました。台風9号が関東地方に接近・上陸したのは8月22日でした。当日は通勤帰宅時間帯の交通機関がストップするなど、午後から夜半にかけて市民生活は混乱しました。

当日は通所系事業所では天気予報により無理な利用を控えていただくなどの措置を講じておりました。よもぎの園でも通常通りの活動体制でしたが台風接近情報により午後1時30分に当日の活動中止を決定、利用者に帰宅を促し、普段の帰宅時の支援体制に入りました。京成佐倉駅経由で帰宅する利用者についても駅まで送り届けました。その後京成本線が運行停止したという情報を得て、搜索したところ、京成佐倉駅に停車したままの車内にいる利用者3名を確認、自宅に送りました。ところがさらに2名の利用者の所在が確認できておらず、それが保護者間の連絡と協力と京成佐倉駅停車中の車内で不明の2名を保護、その連絡をいただいて利用者全員の無事を確認できたのは午後7時でした。

幸い全員無事に所在確認ができましたが、施設側の臨機対応としては不手際があり、今後緊急に対応が必要な場合の業務手順を早急に見直すことといたしました。

ご心配をおかけした皆様に心よりお詫び申し上げます。

### ちょっとお隣まで！

韓国の施設との交流実績がある、韓国出身の職員がいる、そして佐倉は成田空港と近接する地域、という条件がそろい、じゃあ施設の行事として海外旅行もあっていいじゃないか。そんな発想から、障害者支援施設めいわのグループ旅行の一企画として発案されたのが「2泊3日の韓国ツアー」でした。

とはいえ、初体験の海外の旅、また事前のパスポート手続など、近隣の温泉旅行とは違い、付き添いの職員3名も緊張を強いられたようです。ツアーに参加した4人の利用者はいずれも知的と視覚の重複障害者です。ソウル市内で聴覚と触覚と味覚をフルに活用して、異文化体験を楽しんできました。あっというまでしたが、充実の3日間になったようです。

### 「山の日」のメニューは…

食事は介護・支援、健康管理と並んで入所施設の主要なサービスの一つ。“家庭の味”に近づけることや、季節感を出すこと、年中行事に合わせた献立など、管理栄養士の腕の見せどころです。とはいえ、どんなメニューにしようかと、日夜頭を悩ますことも度々と聞いています。祝祭日にはその日にちなんだ献立が用意されるのもそのひとつ。例えば、お彼岸ならおはぎ、敬老の日にはお赤飯、といった具合に。

そこで今年から祝祭日の仲間入りをした「山の日」。その日のスペシャルメニューは、各事業部でそれぞれ次のような昼食となりました。利用者の反応はいかに…。

#### 障害者施設は…『オムライス』

栄養士コメント：「山」のイメージから連想。山頂から切り崩して口に運ぶ利用者、着実に一合目からとりかかる利用者、はたまたケチャップの雪崩(?)を口の周りにつけながらほおぼる利用者と、人それぞれの人生観をみているようでした。

#### はちす苑は…『山菜ごはん』

栄養士コメント：特養に入居されている世代にとって、「山の日?…それは何?」というのが正直な反応でした。でも混ぜご飯は好評で、皆さんおいしそうに召し上がっておられました。

## ▽情報&ニュース

### 事件から1か月…

犠牲者の鎮魂のために、われわれのなすべきことは何でしょうか。

それは、いつ襲ってくるかわからない侵入者に備えることでしょうか。重い障害を持つ人たちを「守る」とはどういうことでしょうか。

相模原市の津久井やまゆり園の事件から1か月余りが経ちました。さすがに事件発生直後からすると報道量は減りました。しかしあまりに深い「なぜ？」の疑問に、なかなか答えはみつかりません。そんな気分のなかで、毎日、東京、朝日の各紙が再び社説で取り上げ、次の見出しをつけていました。

□相模原事件1カ月 障害者を地域の隣人に【8/26、毎日新聞】

□相模原事件 共有したい生きた証【8/26、東京新聞】

□相模原の事件 差別の芽を見つめて【8/27、朝日新聞】

ここで共通する視点とは、対症療法でなく、事件の発する問いの本質に何を見るか、ということ。

関係者から抗議の声が上がり、共感の輪が広がっている一方で、「容疑者に共感を示す意見がネットなどで散見され」、「障害者を否定的に見る社会の暗い一面が事件によって表に出たとも言える」と言い（毎日）、「ことの本質」に「社会の中に厳然とある差別的な意識そのもの」の存在を問題にすべきとする視点（朝日）は同様の見方です。大切なことは、「身体に特徴がある人、会話の手段がない人、そもそも人間は誰であれ同じではない。性格や思考も多様なように、一人ひとり違うのが自然なのだ。どんな違いも認め合い、尊重し合える共生の社会を築くには、不断の意識改革をするほかない」（朝日）と強調します。

福祉施設が現場となったこの事件。重度障害者と施設の関係についても目が向けられています。「施設入所によって地域社会での豊かな人間関係から障害者を切り離し、社会から障害者の素顔を見えなくしていることについても深く考える機会にしたい」（毎日）とは、ほかならぬわれわれに向けられたメッセージでもあります。

そもそも障害者を隣人として受け入れるような社会にしていくことが福祉職の仕事です。「保護」という名目で施設から外に出さない、素顔をできるだけ見せない。残念ながら、そのような障害者観は家族にも施設関係者にもあります。障害者のプライバシー保護が第一、という姿勢を疑わないことが、ほんとうに障害者を「守る」ことになっているのかと、問題提起しているのが東京新聞の社説でした。

ご承知のように、19人の犠牲者の個人情報伏せられています。それは遺族の要望を警察が重視したからとも伝えられています。私もそれが「常識的な判断」だろうと思っていました。しかし「その価値判断そのものに、障害者への偏見や差別意識が潜んでいないか。犯罪史に残る事件の風化に手を貸すようなものだ。そんな批判が絶えないのもうなずける」と述べ、その論拠としては「身元にまつわる情報は、社会の光と影を映し出す手掛かりとなりうる」からだとしています。社会正義を追求するジャーナリズムの精神はそう言います。名前のない「19人」という数字で片づけられる一人ひとりの人生は、あえて知らないことがいいのかと考えれば、確かにそれでは命の重さも伝わらないと思えるのです。

近年障害者福祉は大きく前進しているかのような錯覚に陥っていたところに、相模原の事件にわれわれは不意撃ちを食らった感があります。そして社会の深層に潜む意識をあぶりだすことになったこの事件は、障害者福祉実現の道の険しさを再認識する機会になってしまいました。先月、拙著の連載エッセーの表題を「ひるまず、めげず」としたのは、そう自分に言い聞かせ、また後進にそうエールを送りたかったからにほかありません。

## ▽マイタウン

### 新たな地域貢献活動実施へ

法律で社会福祉法人の責務とされたからやります、では本来の福祉とはちょっと違うと思うのですが、法人の経営ビジョンにしたがって自主的、自発的に検討してきた地域貢献活動が新たに動き始めます。

今年4月から指定管理者として運營業務を委託された「佐倉市南部地域福祉センター」は、文字通りの地域福祉の拠点施設です。住民同士の交流や文化や教養、生きがいつくりのための活動の場の提供を通じて、これまた共生社会を築く一助となることへの期待は大きいといえます。とはいえ、地域に住むだれにも気軽に活用してもらうためには、ただ利用を待つだけでは不十分です。特に「交通弱者」とされる高齢者や障害者の中には、行きたくても足がないという声もあります。佐倉市南部地域は、人口過疎という事情もあって公共交通機関は十分とはいえません。福祉資源の利用が必要な人ほどそのシワ寄せが大きいともいえる状況です。

そんな地域の実情と地域福祉センターの使命、また法人独自に展開している「総合相談」利用の便宜も併せて、施設利用のアクセスに支障のある方を対象に「(仮称)移送サービス」の事業化を佐倉市社会福祉課と協議してまいりました。このほどその実施計画がまとまり、11月から次のような制度外サービスを提供できることになりました。

【送迎車運行日】週4日(火～金)

【運行対象地域】和田・弥富地区

【利用対象者】上記地区に在住する60歳以上の方で、地域福祉センターまたは総合相談センター利用者に事前に利用登録されている方。

【運行使用車両】法人所有マイクロバス(定員20人/車いす利用可)

【運行時刻経路】《第1便》愛光本部 9:30→(停留予定場所)→11:00 地域福祉センター  
《第2便》地域福祉センター14:00→(停留予定場所)→15:20 愛光本部

【料 金】無料

\*詳細のお問い合わせは南部地域福祉センター(TEL:043-486-5151/担当:高木)まで。

### 異常気象? 浸水騒動

8月中旬から9月上旬にかけて台風や低気圧の影響で、大雨洪水警報が連発され、法人各事業所においても大なり小なりの影響を被りました。

佐倉市周辺には洪水を招くような大きな河川はないものの、地形の関係で土砂災害や浸水被害の危険区域は何か所もあります。今回顕著な被害に見舞われたのは地域福祉事業部関係施設です。児童センター、地域福祉センターのある建物では地下の防火用貯水槽のレベルが最高位に達するほどの降水量になり、近隣の道路が冠水して車両の通行が一時不可能になりました。また9号台風では弥富学童保育所で一時停電になり、児童が帰宅するまでの数時間を照明も空調も停止状態で過ごすことになりました。8月24日の集中豪雨では、南部エリアに避難勧告が出されるほどの降水量となり、根郷学童保育所駐車場に停めてあった職員の乗用車が水没し、多額の修理費を要する被害となりました。そんな騒動が職員の勤務交代時間帯と重なるといふ事情も加わって、出勤できない・退勤できないという緊急事態に陥ってしまいました。さらに寺崎学童保育所では屋外の下足入れが強風のため倒壊する被害も報告されましたが、幸い、学童保育所を利用している児童に被害は及びませんでした。想定外(この言葉も使い古されていますが)の天災に例外はなさそうで、備蓄食料を備えるなど、これまでのBCP(事業継続)マニュアルの見直しも必要です。

## あの感動ドラマの裏側で

バリアフリー・バラエティー、略して「バリバラ」。テレビ番組名である。ただし、視聴率はかなり低いので、あまり知られてない。チャンネルはNHK教育テレビ（Eテレ）、とあれば仕方あるまい。この番組、一口で言えば、障害をネタに、笑い飛ばそうというのだ。「障害者を笑う？まさかそんなこと…」と、ちょっと引いてしまいそうだ。

その低視聴率番組がネット上をにぎわしている。8月28日の放送のテーマは「検証！『障害者×感動』の方程式」。番組の趣旨はこう紹介されている。

「感動するな！笑ってくれ！」というコンセプトで始まったバリバラ。しかし、いまだ障害者のイメージは「感動する・勇気をもらえる」というものがほとんど。「なぜ世の中には、感動・頑張る障害者像があふれるのか？」その謎を徹底検証！スタジオでは「障害者を描くのに感動は必須か？」「チャリティ以外の番組に障害者が出演する方法は？」などのテーマを大討論！Twitterでも視聴者となつながら、みんなで「障害者の描き方」を考えます。（番組HP）

ネットの世界をにぎわしていると言ったのは、意表を突くような発想と、このテーマと番組内容もあるのだが、オンエアが日本テレビの「24時間テレビ／愛は地球を救う」と重なり、まるであの「涙と感動ショー」を茶化す番組と見られたからだ。私は今回の「24時間テレビ」は観ていない。ただ「バリバラ」の方は再生動画で観ることができた。「24時間テレビ」がかつてと同じコンセプトで制作されていれば、「裏番組」としては、当然“オモテ”を意識するだろう。当事者を含む出演者は、メディアがつくり上げた障害者像に対して「ノー」と言っている。今年も、下半身不随の少年の富士登山挑戦や、視覚障害、聴覚障害のある生徒たちのよさこいなどが紹介されたようだ。

一方的に“清く正しい”イメージをつくられ、そのイメージ通りの振る舞いを期待される。常に美談の主人公。そんな障害者観がメディアと言わず、多くの日本人に浸透しているのは確かだ。ハンディキャップがあってもそれにめげずにガンバル障害者の姿が感動を呼ぶ。涙なしには観ていられない。

また障害者は“憐みの対象”でもある。そもそも「かわいそう」とは、自分を幸せだと思ひ、他人の不幸を喜ぶ表現だ、とまでいった人がいた。それはあまりに人の心の奥に入り込みすぎる言い方だと思うが、ほんとうに相手のことを理解しようとするれば、当事者を前にして、まず「あなたはかわいそうだ」などとは言わないだろう。

テレビの中にいる障害者を、「かわいそうにね…。でもがんばっていて、えらいね」と涙ぐむ図式を「感動ポルノ」というのだそう。自身も骨形成不全症を患い、オーストラリアでコメディアンやジャーナリストとして活躍したステラ・ヤング（1992～2014）という人が使いだしたという。マイノリティをとりあげてお涙頂戴のストーリーに仕立てることをそう呼んだそうだ。

「チャリティ」という言葉は「慈善」と訳される。慈善事業はまさに“上から目線”の、人を憐れんで行う“施し”にあたる。私もわかりやすさを優先させて、つい「チャリティ」という言葉を使ってしまう。その感覚は「感動ポルノ」をあおりたてるメディアとさして変わらない。障害者＝不幸、それゆえのチャリティ、福祉。そろそろこのパターンから抜け出せ。「バリバラ」はそんなメッセージを送っている。

気がつけば、われわれもそのような「障害者×感動」の安易な方程式にはまり、誤った障害者観の広報担当をやっているのではあるまいか。

（法澤 奉典・のりざわ ともりのり）